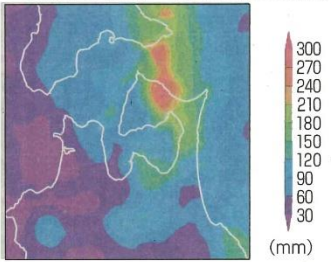


狭い津軽海峡 急速に雲発達

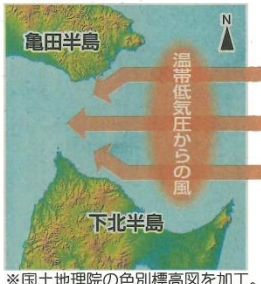
21年下北豪雨のメカニズム

2021年下北豪雨のアメダス解析雨量
(8月9日午前9時～11日午前9時の48時間)



※谷田貝研究室提供

豪雨発生メカニズム



※国土院の色別標高図を加工。海域部は海上保安庁海洋情報部の資料を使用

弘大・谷田貝教授が発表



谷田貝亜紀代教授

2021年8月の下北豪雨について、弘前大学大学院理工学研究科の谷田貝亜紀代教授は、温帯低気圧からの東風が津軽海峡に吹き込んで上昇気流が生まれ、雨雲が急速に発達したとの見解を示し「奥に行くほど狭くなっている地形では、同じような気象条件で大雨発生の可能性がある」と指摘した。11月上旬にむつ市で開かれた「下北ジオパーク 弘前大学共同研究発表会」で、自身の研究室の研究成果を発表した。

同豪雨では、台風9号からの橋崩れや土砂崩れにより変わった温帯低気圧による大雨で、むつ市北部では21年8月9日午前9時～11日午前9時の48時間に降水量約380mmを記録。国道と北海道の亀田半島(函館市)の間に吹き込み「水蒸気を多く含んだ風が両側の山地に挟まれ、リアス式海岸に押し寄せる津波のように高く上っていた」。一方、上空5千～6千メートルは南風が吹き込んでおり、二つの風がぶつかって雨雲が急速に発達したと考えられるという。

谷田貝教授によると、「平成26年8月豪雨」でも九州と四国間の豊後水道に吹き込んだ南風が同様の上昇気流を生み、広島市などに大雨をもたらした。

温帯低気圧 北東に大雨域

谷田貝亜紀代教授は11月上旬の研究発表会で、台風が温帯低気圧に変わる時、大雨の降るエリアが台風の目付近から北東側へと移ることが分かったと説明した。温帯低気圧が日本海を通過して本県に向かってきた場合、中心部が到達するより先に大雨が襲うことになる。谷田貝教授は「温帯低気圧に変わっても勢力は強い。中心部から離れていても要注意」と警告する。

谷田貝研究室の学生らが、過去の台風や温帯低気圧のデータを400千例重ね合わせたところ、温帯低気圧では中心部の北東300km前後が大雨のエリアだった。2021年8月の下北豪雨も、温帯低気圧の中心部が本県の南西にあった時に発生した。

谷田貝教授は「温帯低気圧になると、勢力が弱まったような印象があるが、台風だった時に集めた大量の水蒸気を抱えた状態」として、引き続き警戒する必要があるとしている。

(赤田和俊、川越真也)

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。

東奥日報社に無断で転載することを禁止します。

[問合せ先]

弘前大学理工学研究科

E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp